

本光寺 飛龍 仏教壮年会報

2007(平成19)年

9月発行 No.47

● 8月6日の境内の草取りに大勢お集まりいただきありがとうございました。おかげですっきりとした庭でお盆を過ごすことができました。今年は連日の猛暑、例年ですとお盆が終わるとすっかり秋風で、急に涼しくなるのですが、9月にはいってもいつまでも暑かったですね。おまけに台風までやってきて心配しました。でも、会津はたいした被害もなかったようで、よかったですね。そして、朝晩はけっこう涼しくなってますぐしやすくなりました。夏の疲れが出てくる頃です、体に気をつけてください。



仏教壮年会総会 のお知らせ

10月27日(金)

午後7時より

本光寺本堂にて

年会費 3,000円

例会費 3,000円

をご用意ください

出欠は同封のはがきで

● 9月13日に仏教壮年会の役員会を行いました。話題は会員の減少でした。設立当初の会員の方などは高齢化・体調不良などで、おいでいただけなくなりました。新しい会員を増やすにはどうすればいいか、いろいろ皆さんに考えていただきました。元会員の息子さんに声をかけよう。お寺の行事にきている人に入っただくようにお願いしよう。村のほうにも呼びかけ

若松組仏教壮年会連盟 報恩講並びに研修会

日時:10月20日(土)

午後1時半受付 2時開会

会場:真龍寺

講師:松井丘司師

会費:2,000円

お申し込みは同封のはがきで

聖典・念珠・門徒式章を

お持ちください

よう。以前行っていた研修旅行をまた計画しよう。いろんな声をいただきました、入ってよかったといわれるような企画をし、さらに地道に声をかけ続けるしかないようです。

● 左の通り仏壮連盟の報恩講が行われます。他の仏壮の方々との交流も参考になりますので、ご参加ください。また、後日ご案内を差し上げますが、10月27日(土)28日(日)に本光寺の報恩講を行います。去年は会館の落成法要をかねておりましたので、時期も遅く日曜だけの法要でしたが、今年からは以前のように2日間3座の法要です。1週間ほど前から掃除をはじめ準備作業にかかります。お手伝いいただける方、ご都合のよい時おいでいただければ助かります。

(裏面は唯宏の指導教授のお話です)

愚かな自分に気付かされる

浅田 正博 (龍谷大学教授)

自分自身への取り決め

よく「戒律」と表現されますが、戒と律とは違う意味があります。仏教では自戒・他律と言って、自ら戒めるのが戒で、他に律せられるのが律なんです。自ら戒めるのが仏道の基本ですが、どうしても、「わかっちゃいるけどやめられない」のように自ら戒めることのできない場合、きちっと律を定めてその身を拘束したりするわけです。だから自ら戒める自戒が、仏教の大前提となりますね。

ところが、戒律というのは、初めから制定されていたのではありません。「随犯随戒」といって、仏教教団の中で出家僧侶たちに問題が起きたときに、お釈迦さまは、「それはダメですよ」と戒を定めていかれたんです。

では、どんなときに、「ダメですよ」と言われたかといいますと、仏道修行に対する障害を起こしたときですね。「そういうことをやると、あなたの進んでいく成仏道に対して障げになりますよ」と、戒律がだんだんと制定されていきました。だから戒律は、自分が修行をしようとしたときに起こってくる問題であり、それを守るということは、成仏への一番の近道を歩んでいるということになるでしょう。

その意味では、柔道や野球道など、大きな目的を持って、自らを戒めながら一つの道を歩んでいくことは、仏道の戒律に通じるものがあると思いますね。戒とは、大きな目標へ道を進んでいくときの自分自身の取り決めですね。だから、定められた戒の他にも、自分はこういう戒めを守ってますということを仏教でもよく聞きます。

定められた戒律は、一面すごく不合理で、修行をしていて、腹立たしいこともいっぱいあります。でも、後から、「なるほど、このためにあったのか」と何度も感激したことがあります。一代や二代前にできた規定とは遠い、二千数百年の間、多くの人々がその道を通して仏さまの世界へ歩まれたわけですからね。

血が騒ぎ体温上昇する

たとえば、戒律の一番目は不殺生戒です。生きとし生けるものを殺してはならないという戒めです。命を取るとするのが一番でしょうけど、私が、「なるほどなあ」と感じたことがあります。

修行者は肉食をしません。それは一番に不殺生戒に反するからでしょう。これが基礎ですが、それ以上に私が、「なるほどなあ」と思ったのは、座禅をやっていると、植物だけを食べているのと、動物を食べているのでは、心の状態が違うんですね。これは何度も禅をして感じたことですが、肉を食べると血が騒ぐといいます。血が騒ぐということは、精神統一の境地に入りにくいということです。

たとえば、数息観をやっていても集中できない。数息観とは、座禅の姿勢で、息をゆっくりと吸って吐いて心の中で、「ひと〜つ」と数える修行なんです。「ふた〜つ」「みっ〜つ」と十まで数えたら、また一から繰り返し数えます。早く数えたら案外数えられるもんですが、ゆっくりゆっくりですからね。吸って吐いている間に、他のことを考えてしまうんです。

「息に精神を集中しなさい」と言われるのですが、なかなかそれができない。一番よく分かるのは、蚊が飛んできたときです。ゆっくりと、「ひと〜つ」なんて数えてるときに、プーンと飛んできたうえに顔なんかをチクッと刺されると、「こんちくしょう」となる。そうしたら、今いくつ数えてるか分からなくなります。

明け方の座禅でしたら、夜明けに鳥が、「チチチッ、チチチッ」とものすごい大きな声で鳴きますよね。「もう朝やなあ」なんて思うと、もうダメですね。台所から朝ご飯のいいにおいがしてくると、「ああ、今日の朝ご飯はなんやろなあ」なんて、簡単に思ってしまうんです。

もう、こんな邪魔なんていっぱいあります。お肉を食べると、それが余計にひどくなりますからね。

他にも、禅寺の門には、「葷酒山門に入るを許さず」と書かれてあります。「葷」というのは、ニラやニンニクなのですが、体が温まるというのも肉食と同じで血が騒ぐんです。女犯も同じですね。だから妻帯も禁止しているんです。

仏道修行上の降参

でも、僧侶でありながらも、親鸞聖人はご自身のことを「無戒名字の比丘」と呼ばれています。「無戒」というのは「破戒」とは違います。破戒は戒律を破ることですから、戒律が基礎にあって、「私は肉を食べません」と誓いながら破るのが破戒ですね。ところが、無戒というのは、最初から戒律を守ることのできない私という深い自己認識があるんです。受戒すらしないのですから、破る戒律そのものが無いんです。ですから、これを私は、「仏道修行上の降参」と呼んでいます。

戒を守ることが基本の僧侶でありながら、守るべき戒が何一つ無いなんて、そう簡単には言えませんよね。自己を見つめ、煩惱具足の凡夫であるという深い自己内省から無戒という言葉が出てくるんでしょう。だから戒律を一つとして守ることのできない、名前ばかりの僧侶ということで、「無戒名字の比丘」という言葉を用いられたんでしょう。

今思うと、私も比叡山や禅寺での体験を通して、仏道修行の厳しさや、無戒という言葉の深さを追体験したように思います。その意味で、戒律は私にとって、「なんて愚かな自分なんだ」という自己内省を促してくれる取り決めだったような気がしますね。

(御堂さん 2007 年9月号より)